



近世櫻田紀聞

五

三編

上

六

13
3307
5



門八13
3307
5

長門

明十

櫻田紀聞第三集

詠史五首

和邨春輔自任

大正八年 四月九日
木大學出版部 贈

風彩稜二無比倫欲回屯運挫姦臣廟
堂今日使公在應必率先贊一新
雲灑夙顯執權衡耳繫皇州敗與成公
若早驅羣小徒邨教大厦心朝傾

夏

捐命酬恩如芥塵櫻田事迹泣行九噫
君一舉全忠孝千載芳名在顯親
武技通神技上傳蒲腔膽氣欲衝天非
非憲二如雛敵奮與水藩為義先
奉事殷勤豈賣媚衛冬裁縫苦心思夫
君殉國身殉節一首和歌使世悲

以五絕句代序言余固不嫻詩知
不免世笑但借韻語以言胸中之
所欲言耳看密請恕之在明
治九年三月接筆於小休庵南
窓梅花破蕾時茶聲
吾影在

柳東松邨主人再識



樵山小室之書



上杉輝正大將

松平大陣守

前

口力者

接田御口

堀

西丸

井伊侯登城、
半途水府浪士
行例ヲ用△圖

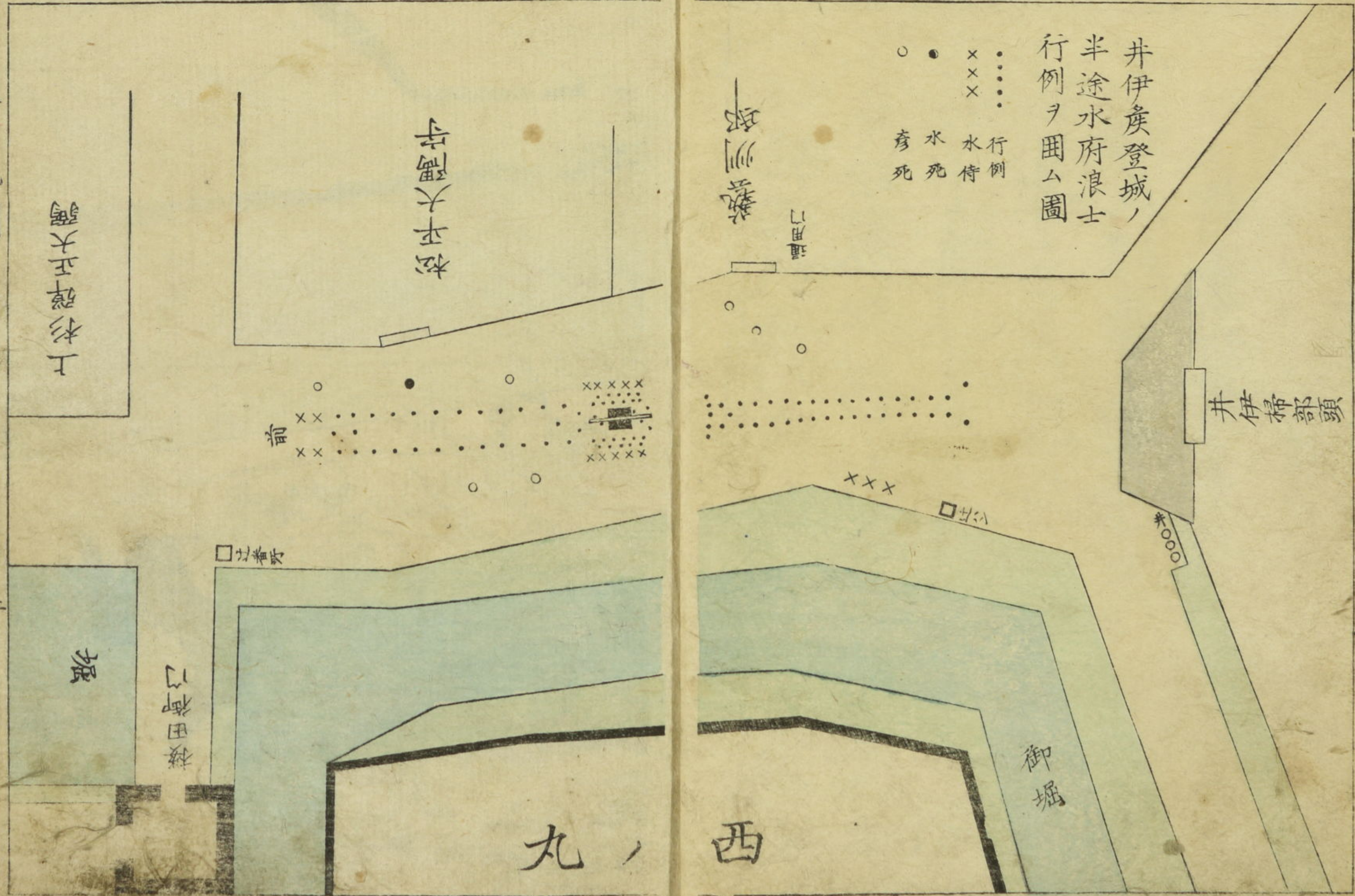
○ ● ×××
彦死 水死 水侍 行例

井伊

口力者

井伊掃部頭

御堀







櫻田紀聞第三集之序辭

本傳の距今十有餘年の過言より文運隆
盛の現今より頗る陳腐に贅書に附屬
せど皇威昇龍の兆し我見り緒書
あまひ又捨つべしふみくか就中
井伊直弼侯の如き先見卓越の賢
文をわく外交通志の今日を遠慮

ありしや權暴の甚しき止むる歟も
亦見りふ豆るぐ蓋し櫻田は一擧身
命を抛ち事を起し十士も開明の見を
以て論ぶる昔も所謂頑固の所為に似
せど悪國の赤心顯然とて止を得ざる
とせば評するふ辞葉あり噫天命は是
哉非なる歟己一日櫻雨園の草堂を訪る

机上一冊の草稿あり依て閱したまふに
櫻田紀聞の第三集なり故に聊卷端の愚
言を陳ね以て本文中の曲直と編者の是非
とを問ひ隨而高評を乞ふと云爾

于時明治九稔三月櫻田の紅雪
十七年忌の當り日

細雨園春驪識

鶴田容書



近世櫻田紀聞卷之五

東京寄留 松村春輔著述

第拾一回

却而説呂川新宿ある山寄屋が樓上を既も有村雄之
助も至り會するは庭上の酒宴あはれ閑あり徳り程は有村
治九衛門を陰う此家の亭主の計り酌取女を残り
く擯けり是よ一議を談むるゆ事漸く調ひ
り諸君の異見服膺あり

櫻田己月三二

竟

124

存意ぞんいの知しらぬぬともとも、~~緋~~緋ひを誤あやまるる評議ひょうぎの不決ふけつあり、掃部そうぶ頭かみを討うち日ひを上あげ已おの朝あを後あるるあ、登城とんじやうの折せを機曾きそと
 做し一時ひとときの侵撃あへげの外ほか他ほかふも、策さくのあるるべしと、醉すい
 乘まりて論ろんぶるるを金子かねこ教孝けうかう之これを制さし、恠うる大事だいじを譚だんぶる
 又また恠うる聲高こゑたかふ做し時ときを壁かめも耳みみの恐おそまあり、諸君しよくん各
 見込みこの事ことを書附かきつけゆ、そのあそ、其そのの同論どうろんの多おほきあよ
 り百事ひやくじ一決いつけつ不平ふへいあるる中なか、尚なほも賢慮けんりょの程ほどを仰あやむと云いへ

一列いちれつ其儀そのぎ小同せうどう、皆速みなすみく書附かきつけたるるを金子かねこ教孝けうかう関せき
 視みるるの侵撃あへげの日ひを来きル三日さんじつ大老だいらう登城とんじやうの途みちを能よくとせし
 者もの十五通じふごつうあるるふより、終はつは三日さんじつを期限きげんと做し、緋ひ終はつを
 各件かくけんの趣意そうい書かを、内藤うちのとう紀伊きい守しゅの自訴じそせん事こと、決局けつきよく
 有村ありむら兄弟けいだいの謀まり、此儀このぎ尤なほも然しかるるべしと、金子かねこ齋藤さいとう有
 村むら等ら乃なち其手配そのてはいを定さめけるる有村ありむら治ち左衛門ざゑもん殿どのの劔術けんじゆ御
 丹練たんれんあれ、其日そのひを渠かが先供せんぐの切込きりこを無なし、無なし、切散きりちら

奥日記

のりつゝ、~~諸~~此手ふ加ちり援けん者も増子金六郎黒
 澤忠三郎廣木松之助殿の三個あり、右の四個が先供を
 切散し、あつゝ先供のみ狼藉ありと呼ちりて渠等騒動
 するの勿論あり、然も駕籠殿の供廻り等も先供を助
 んと彼所へ走ちり、駕籠殿自然と備へあは透せ計りて
 中央のドンドルの銃炮を紙も巻き願書の体は仕
 做し偽り直訴する者の体と見せ惹け駕籠殿近く進み
 より掃部頭の不意を討つ、此手の役を杉山弥一郎殿

御

とくを用ゆべく、~~這~~も多年炮術は御丹練あり、~~絆~~望
 らず失策ありと所々杉山進を出入り、~~這~~も有り難き仰
 せうありと勇進んご見へたりける、此の助けの稲田
 重藏をあん撰とける重藏は長さ四尺あり、穂先八寸
 の手鎗は紙を巻き付け杖と見せうけ引摺出んの準備
 あり、彼のドンドルの發聲を相圖は件の手鎗の穂をひ
 らめり、駕籠を目掛り突るべし、~~此~~時ちかく駕籠と取
 圍掃部頭を討取ん者、佐野竹之助殿然るべし、防戦

人々より齋藤監物高橋多一郎森五六郎関鏡之助
 岡部千次郎海後嵯峨之助殿斯申去金子孫次郎等都合
 七人杉山氏の助けとあり佐野氏を守護する事を専
 らしき時々前戦後鬪の其危きを防ごうと夫より
 跡ある總供と切斃しあり有村雄之助殿を首めと倣
 大関和七郎蓮田市五郎高橋莊左衛門森山繁之助鯉淵
 要人山口辰之助廣岡子之次郎殿各力のあらん限り手
 報ふ者ハ切斃し日頃の怨を復さべしと衆議漸く果

頃夕陽西に斜めり折々小雨降りける
 りぞ海原の風色も亦一層の眺望をよき平が中なる風
 雅雄等ハ興に乗ら詩を吟し歌を胡詠杯をふる宿路
 又遠き乙甲も三日の未明愛宕山は勢揃へせん絆と約
 速做し飯くけり此里は名高き何某の
 妓樓に登り名残の愉快を樂しむも亦多うりき悠々
 程は有村治五衛門も此日の亭主ふりあまを先山寄
 屋の入費を償ふ耐取り奴僕等も厚く其日の勞を

別行
いあ

謝し我が宿路は飯りける既三月三日に至しうど
 中明やぬ東雲より一天速は薄ぐうう霏々としを
 雪降り菟り視る間は四五寸積り果を序次は大
 雪と做り物を屑友せぬ彼の同盟の丈夫男其の
 井葉を異あま心同く鍊石の契ひ時刻は後
 と愛宕の山は集り第一番の齋藤一徳何を鬼も
 あは此雪をまぢり避けん合點まう山守る翁は特
 るもの床机三ツ四ツを借受け聴く南の方

はる東

目録

ありける額堂は持ち来り吹雪を避り待受けし追々
 同盟の壯士も寄り来るもの総々十七八人及びける
 一徳を翁は乞ひつ硯と筆と借り儲け聴く悠々
 詠ゆ
 胡馬南来久不歸山河踏破一身危功名誤我齋雲過
 歲月驚人和雪飛每事恐貽千歲笑此躬甘與衆人違
 只今唯有君親在血淚紛々點客衣
 一徳を名あり監物を通称し号は文里とあん云り

三安せん

此詩の清人某の作きやうじん かのらと一徳ひととけの緯いとは附會つゝひせしものか
 りとりんる者あり然りとりんるも未いまど其證そのあかしをいふ
 探り得たづねざるは暫時しばらく茲ここは具備くわいびさるも興風集きやうふうしふ長門ながと松村まつむら塾しゆく振ふる
 氣篇等きへんとうはありあり徳而とくを壯士等さうしとうは時刻ときも能よくと思ひ
 けん女坂にんざかより麓ふもとは下りあのが隨意すゐい出立いっしやくハ一様ひとしやうありぬ
 冠笠心かんかさこころありあり赤合羽あかがら降来かろる雪ゆきは足許あしもとを踏ふくありぬ
 諺の人ことわざのひとを武士ぶし咲花さきはなの櫻田さくらでん差さる急いそぎける
 一因いちいんは云愛宕山うみまがたさん来集らいしふの條下じょうげの區々くゝの論說ろんせつも尠すくなくありぬ

と左ひだりの掲かげ一ひと届とけ書かき小こより自然しぜんは真説まんとくあるを讀よみ
 知るべし

沙届申上候支

一當月いちとうげつ三日朝さんじつあさ五ツ時頃ごじころ侍五人町人さむらいごにんちやうじん体ている者もの屯人とんじん下誌げし
 傘かさをるを岩いわ社やしろの集あつ積つ所ところへも礼受れいじゆる者もの雪見ゆきみ後ご度ど也なり
 額堂がくどうへ下くだ暫時しばらく借度かろどト申まをせり守まもり礼授れいじゆ出役僧しゆつていそう並なら知し
 旨申あまのまを答こたへ右額堂みぎがくどうへ下くだ茶ちや座ざ床とこ机ぎ積つ並なら服ふくと三脚片さんかくぺん身み
 有ある之の處ところ何なにれも腰こし掛か山番人さんばんじん八藏はちざう下くだ者ものヲ相招あひまをキ煙えんトと

櫻田日記 三十一

櫻田 七 團三上



其朝義黨
愛宕山の
額堂よ來
會は

櫻田 七 團三上

牙
彦
一

貸

火茶と乞且硯箱ヲ借度旨申候間
品と借遣し暫時雪見の葉斗
番人と借金或兼是る酒を非求の跡
分程りと呼返し耻敷事と心得
下帯あはれ間二筋買求め是
同人史々買求め立決り見
り系も存居得共夕景に及
物音

X

額堂跡片舟の糸の紐及舌やりの物
拾ひ見の別紙名書付右買物の
多載ありは書附る白実尋ね
本綿と一緒仕舞置長得共今
不申後捨物之儀は先日湯届申
俵者より刀屋より清浄裁
風呂敷の色と有る格右外
申候其後役僧食事と下り
八藏儀一切存り申

櫻田北開三士

春日紀略三十一

書指と存世得共面休不及申人數之程も覺へざる座は
此外官場所々見受者著き人なる事座は前書此段
有之俚を申上長以上

申

愛宕山

圓福寺

三月九日

是より直ち櫻田討撃の條下書綴るべしあるを牙
大尾の巻め至り説き尽さざる欲は編者の腹稿あれバ
讀入更々怪しむ事勿き世の人常々櫻田の舉動を畏

分 用 不 区

くくも水戸景山公の身を押籠て退陰あせしも緯成井
伊中將が獨の暴威より謀り儲けし事ある何と
ぞくく中將を斃んものごと積日怨を物あらしめ其臣
家も俱より是の憶ふより遂は景山公の鬱鬱と
散せんが爲は有志等國を脱しよるふ起るあんとりへ
まゝもあまこと這ハ私の考へる片腹痛き想像あり抑
水戸景山公を學識英才温厚の人とありおあましく聊
たも私怨をゆめけぬ小人あらんや此公初めの名を

春日紀略三十一

九

後指と存世得共面体不及申人数程も覚へて座
此外台場所見る見受者まゝ人の名をいはず前書此段
有る修多申上長以上

申

三月九日

愛宕山

圓福寺

是より直ち櫻田討撃の條下書綴るべし
大尾の巻に至り説き及ぶる欲を編者の腹稿もれば
讀入更々怪しむ事勿き世の人常々櫻田の舉動を畏

こゝも水戸景山公の身を押籠て退陰あせしも緯威井
伊中將の獨の暴威より謀り儲けり事ある何と
ぞぞ中將を斃んものをも積日怨を物あゆめを其臣
家も俱より是の憶あより遂に景山公の鬱霧を
散せんが爲は有志等國を脱しする小起るあんとりへ
まゐるもあまの這の私の考へる片腹痛き想像あり抑
水戸景山公も學識英才温厚の人とありおあまの聊
たも私怨をゆりけぬ小人あらんや此公初めの名を

櫻日記月三上

九

敬三郎とくへる二郎の君も在ける兄君も早う家を
 嗣せぬひく中納言齋脩卿とみんりへう悠々敬三郎の
 君も幼きより只管文武の業を學びぬひく英敏の所へ
 世も高きりし此君も尚も下さずの事情をさん知
 らぬんとく國中を遊歴あり常より儒者ありける岡井
 富三郎とのへる者而已と附屬と做しつる奢りを省き
 節檢を昔と三十一年の春秋を過しぬひき此年のこま
 文政十二己丑の年あり然るは葉月四日兄君黄門卿の

假初の病ひもき薨りぬひし若君一人もあらず
 此度の世嗣あり敬三郎の君を立てぬふさんと國家老
 參政等も強つて議しける折しも江戸礫川邸に在勤
 の參政等も陰く小喋り召しつる將軍家の連枝を申し
 乞ひ世嗣とみせが時の勢あり得る而已あり申隨が
 づきどのも等も國中に威を振るると既畧事を謀り
 由水戸城に聞へるが之一大事と俄くは衆議し
 即日水府を發足あり江府の邸に至るもの九百五十餘

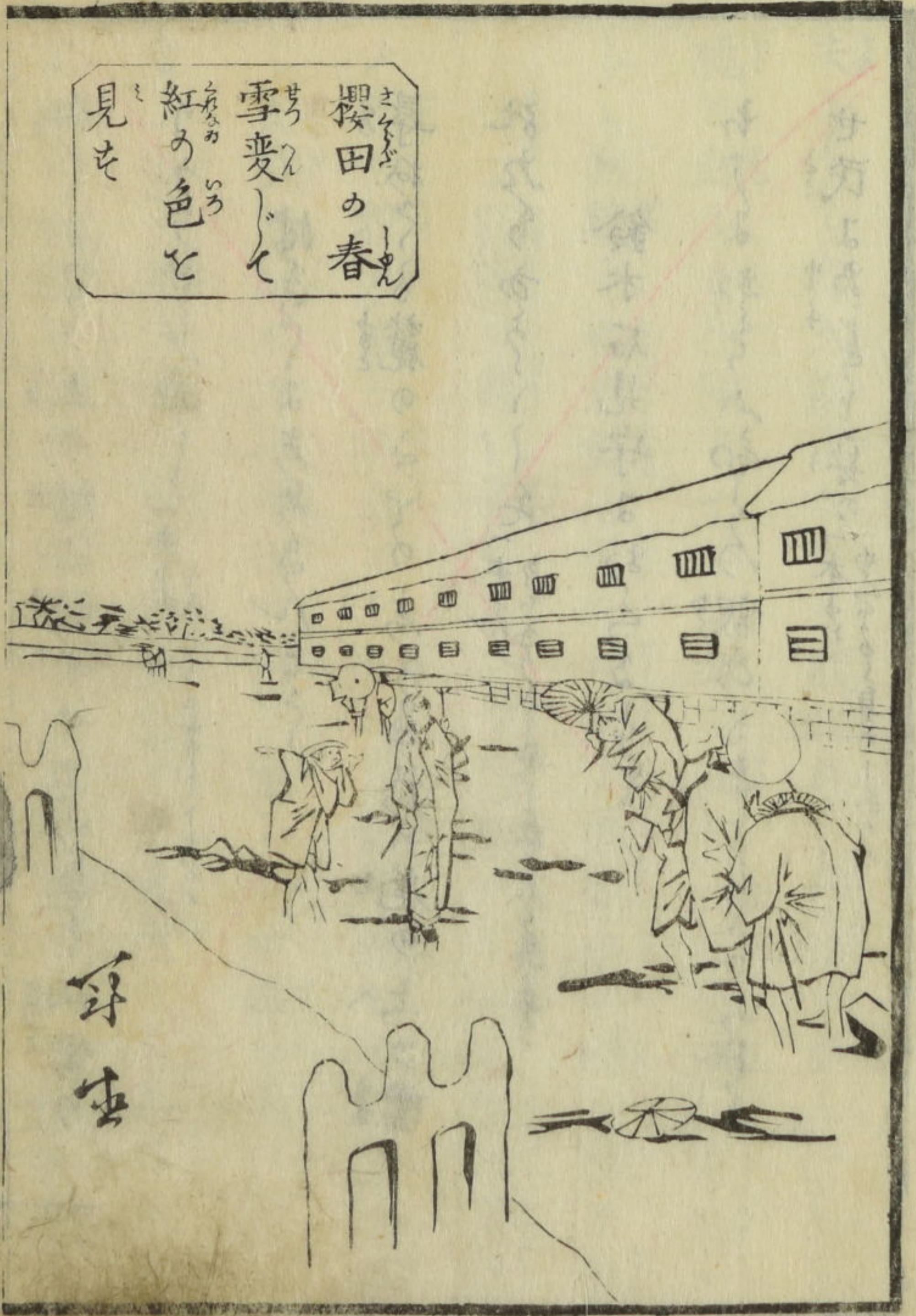
入尤も事を取るもの七山野邊主水正たけのへが男兵庫松平おんべい圖
 書の男將監おんまさみを始めとて藤田虎之助ふじたとら會澤恒藏あざひつねざう杉山千太すぎやまぢんた
 郎らう葉原幾太郎はばらひこたろう等邸内らうちのうちにに至り見みる小果こみて噂うわさの如く幕まくら
 府ふの幼君おんなぎみを申まうし受けん事を願ねがひ出いでし其事そのこと央あむら
 決けつしたるありさ故ゆゑ道みちを一いつ刻くわくも猶豫うやうやする際さい合あひあ
 せと其夜深更よふみよに至りし右の輩たぐひを大塚吹上おほづかふきあみる守まも
 山侍やまざむらい從頼慎閣よりたしげんかく老らうが許もとに至り對面たいめんあらん事を申まうせし所ところ
 不時ふじの見参けんさんを館たての掟おきてに背そむくのをうら深更ふかみよの事ことよりあ

見参けんさんのやどと叶なふやうと答こたへらるるを兵庫ひかく等らはかく
 返かへしつゝ并なり理ことよりある仰あやせあまを屋形やがたの大軍おほいりぐん一いつ刻くわくも
 猶豫うやうやするべしああらせと夜よ小入こいりしを憚おそりし是こゝ所ところ
 参殿さんでんをよみせしあり見参けんさんのやど許もとしぬをさし一同いつどう柳やなぎ
 館たてより自裁じざい仕つかりて果はたしと決心けつしんの体ていは見みへけるよを
 守山侍まもりやまざむらい從より驚おどろきせ速はやは面會めんかいありしうら這回こゝの世嗣よせきよの
 夙もと又また黄門おうもん郷きやうが遺言いごんの序次じよじもあるをも敬三郎けいざうらう君きみを立た
 旨あざな在國あざなの者もの総すべつゝ願ねがひ出いんとする折せしも在府あざなの

もの私^{まじ}に謀^まらひ御^ご連^{れん}枝^しと乞^こひ奉^{まう}り趣^{おもむ}き我^{われ}等^ら更^{さら}は其^{その}
 意^いを得^えまよ^よや将^{しょう}軍^{ぐん}家^けの御^ご掟^{おきて}も^も幼^{よう}君^{くん}を^をあ^あら^らる^ると^とも
 臣^{しん}家^け服^{ふく}せ^せさ^さま^まの^の國^{くに}治^ちら^らる^る故^{ゆゑ}は^は這^こ回^がの^の世^よ嗣^ぎも^も敬^{けい}三^{さん}郎^{らう}
 君^{きみ}と^とこ^こを^を在^{ざい}國^{こく}の^の藩^{はん}士^し一^{いつ}同^{どう}願^{がん}ひ^ひ奉^{まう}る^るよ^よ涙^{なみだ}あ^あら^らる^るよ^よ乞^こ
 ひつ^つも^も黄^{わう}門^{もん}卿^{けい}が^が遺^い書^{しょ}を^を根^ね本^{ほん}三^{さん}郎^{らう}より^{より}守^{まも}山^{さん}侍^{ざい}従^{じゆ}は^は渡^{わた}
 け^けも^も侍^{ざい}従^{じゆ}ら^ら之^{これ}と^と篤^{とく}と^と讀^よま^ま此^こ遺^い書^{しょ}の^のあ^あら^らる^る頼^{たの}
 慎^{しん}が^が身^みを^を代^かへ^へも^も幼^{よう}君^{くん}の^の儀^ぎを^を止^やめ^め敬^{けい}三^{さん}郎^{らう}君^{くん}を^を立^たて^てお^おも^も
 さん^{さん}中^{ちゆう}公^{こう}さ^さの^のを^を取^と取^と做^し侍^{ざい}ら^らんと^と堅^かく^く契^{ちぎ}ひ^ひを^をひ^ひま^まれ^れ

兵庫^{ひんぐう}等^らの^の此^こ館^{かん}を^をま^まう^うり^りけ^ける^る之^{これ}より^{より}五^ご日^{にち}を^をう^うり^りの^の日^ひ數^{かず}
 を^を經^へて^て敬^{けい}三^{さん}郎^{らう}の^の君^{きみ}を^を世^よ嗣^ぎと^と定^まむ^むを^をま^まう^う将^{しょう}軍^{ぐん}家^けより^{より}
 指^し令^{れい}の^のあ^あら^らる^る此^こ回^がの^の事^{こと}に^に係^{けい}ら^らる^る家^け臣^{しん}等^らに^に更^{さら}
 あり^り常^{じょう}陸^{りく}の^の士^し民^{みん}ら^らも^も俱^{とも}に^に萬^{まん}歳^{ざい}と^とあ^あん^ん唱^なへ^へけ^ける^る悠^{ゆう}々^々敬^{けい}
 三^{さん}郎^{らう}の^の君^{きみ}を^を水^{すい}府^ふ城^{じやう}に^に移^{うつ}り^り國^{くに}の^の主^{ぬし}と^と做^しら^らる^るあ^あら^らる^る時^{とき}詠^よを^を
 出^でた^たち^ちひ^ひ歌^{うた}あり^り
 中^{ちゆう}納^{なつ}言^{げん}の^の君^{きみ}の^のた^たち^ちひ^ひけ^ける^るま^まう^うよ^よ此^こ國^{こく}
 を^をう^うけ^けつ^つま^ま

櫻田の春
 雪變とて
 紅の色と
 見を

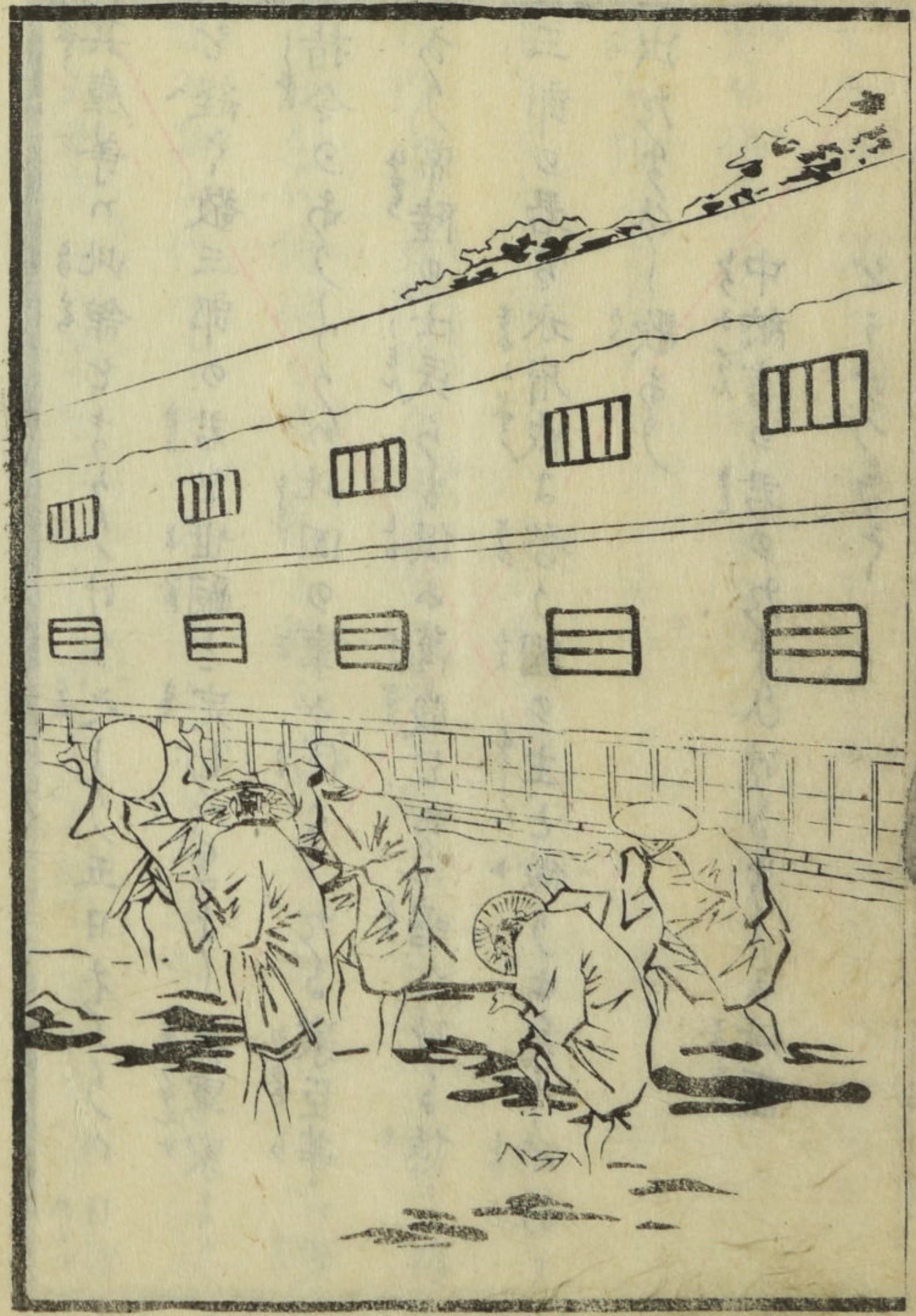


櫻田の春

十三

見を

櫻田の春



中くよひる玉の緒は絶る世たつとて此世の

~~ううらうらう満一本あり~~

~~はまぐしはきめさんとし~~

尋ねるも麓のさやりのあはれは尾の上の雲

~~死なちあはれし一本あり~~

鈴木石見守はあはれとし

~~あはれあはれあはれし報ひもあはれぬみねと~~

~~世民はあはれし身の一本あり~~

夫より一々天保十巳亥の歳始めて學校と申すけん

憶ひ起し申す同日十二辛丑の秋七月校所盡く落成せ

しうが 聽し弘道館と号け中央は武甕槌の神と齋き祭

り傍は孔子の廟を營そ且つ弓馬槍刀炮術の類ひ其學

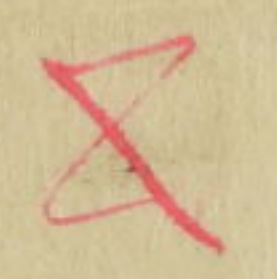
ぶ所を授け申す復國史を修むる 彰考館をも其中に移

す文武を試せ申す所より游于藝とりの額を扁と申す

申す君の成り申す所を至善堂と申す号け申す専ら臣

家等の勉強を勧め此館の幹事より青山延年會澤安の

~~二個を撰挙^{せんきよ}倣^{なま}しひき之^{これ}よりして此^{この}君^{きみ}も官爵^{くわんかく}次第^{しだい}は
 進^{すす}み従^{したが}三位^{さんい}の中納言^{ちゆうなごん}小昇^{こしょう}りひ善政^{ぜんせい}美事^{びじ}ある故^{ゆゑ}奉^{たてまつ}は
 る^ま違^{ちが}ひ^まは^ま忠^{ちゆう}信^{しん}と星月^{せいげつ}を^を経^へて^へ萬延^{まんえん}紀元^{きげん}八月^{はつがつ}十五日^{じふごにち}水
 府^{みづ}の弘道^{こうどう}館^{くわん}ゆき覺^{かく}り^りひ^ひ享^{きやう}年^{ねん}六十^{ろくじゅう}壹^{いち}歳^{さい}あり同^{どう}廿^{にじゅう}七^{しち}日^{にち}
 同^{どう}國^{こく}久慈^{くじ}郡^{ぐん}太田^{たゐだ}の郷^{きやう}瑞龍^{ずいりゆう}山^{さん}は葬^{さう}り奉^{たてまつ}り^り謚^しして烈^{れつ}公^{こう}と
 あん崇^{あきら}め^めけ^ける^る小^こ臈^{らう}と朝^{てう}廷^{てい}より^りも文^{ぶん}久^{きう}二^に年^{ねん}閏^{にじふ}八^{はち}月^{げつ}六^{ろく}日^{にち}
 従^{したが}二^に位^い大^{だい}納^{なつ}言^{ごん}を^を贈^{くわ}り^り玉^{たま}ふ^ふ此^{この}日^{にち}も^も閣^{かく}老^{らう}水^{みづ}野^の和^わ泉^{せん}守^{しゅ}執^{しやく}達^{たつ}
 の上^{かみ}使^しより斯^{かく}の如^{ごと}き^きの大^{だい}君^{きみ}あ^あまの^の度^ど量^{りやう}の大^{だい}ある^{ある}尤^{なほ}も~~



~~計^かる^るべ^べく^くく^くさ^さを^を何^{なに}七^{しち}私^し怨^{えん}と^と含^{くわ}み^み中^{ちゆう}將^{しやう}と^と斃^げさん^{さん}と^と憤^{ふん}
 ろ^ろ物^{もの}せ^せる^るる^るの^の小^{せう}慮^{りよ}あ^あらん^{らん}や^や尚^{なほ}此^{この}公^{こう}の^の傳^{でん}聞^{もん}ハ^ハ本^{ほん}傳^{でん}
 の^の始^{はじめ}め^めゆ^ゆも^も委^えけ^ける^る茲^{こゝ}の^の其^{その}漏^{もら}る^るを^を摘^とと^とる^るて^て公^{こう}
 の^の明^{めい}徳^{とく}を^を録^{ろく}せ^せの^のと^と看^{かん}察^{さつ}心^{しん}して^{して}世^{せい}評^{へう}の^の誤^ご謬^{りやう}は^は迷^{まよ}ひ^ひあり
 け^ける^る是^{こゝ}即^{すなは}ち^ち本^{ほん}文^{ぶん}の^の眼^{がん}目^{もく}ハ^ハ関^{かん}を^をま^まり^りけ^ける^る~~

第拾貳回

~~茲^{こゝ}は^は上^{かみ}己^みの^の朝^{あさ}春^{はる}雪^{ゆき}の^の降^{くだ}来^りる^る間^ま暫^{しば}しの^の間^まひ^ひは^は有^あ村^{むら}治^ち也^{なり}
 衛^{ゑい}門^{もん}兼^{けん}清^{せい}の^の血^ち滴^{たつ}る^る刀^はの^の切^き先^{さき}は^は賊^{てい}の^の首^{あたま}級^{きゆう}を^を貫^{つら}ぬ^ぬき^き持^もつ^つ~~

何や〜ん薩摩音も高うう小説ひつ〜辰の口の方
 走り〜と衆は抽く戦ひけん數ヶ所の深疵は今も
 や心神共はゆる〜うが是も〜ありと思ひ切ら短刀
 押取り目覺〜終は自殺を倣〜けり時移り辰
 の口の辻番より自殺せ〜ありさうを其所在住の用入
 は訴へけ〜夫々之と檢視あり將軍家へ届けら
 書附の馬〜はたかし
 辰口酒井雅樂頭拝領屋敷辻番所廻り場内今三

日五ツ半時過キ年齢廿七八歳位侍俸は男馬乗袴
 フ着シ大小共鞘計リヲ指シ咽喉ヲ疵付相果候程
 ニ大小共ニ中身落シ有之候旨辻番人申出候間早
 速役人共見届候處お違無御座候ニ付其終番人付
 置申候右死骸奈何可仕哉此段奉伺候以上

酒井雅樂頭家来

宮崎嘉兵衛印

三月三日

辰口の遠慮但守防元組合辻番所廻り場内今三

~~日めり宮内少輔キ侍辨了男死骸喉突切害被り者首
と結死在り旨辻番人届出ゆるる速掛り者為見
届ゆ事相違存所産之月主人名条承り少礼松平修
理と史家来り申ゆ人とも云舌確と未分り申
ゆ依り多尚仕重ゆ以候不取敢浮存申上ゆ以上~~

遠着但守家来

三月三日

水巾七九番門印

其日將軍家より右届けの序次より檢使と遣せされ

ける辰の口遠藤但馬守組合辻番所廻り場内は自裁
せ侍昧ある男の死骸を薩州の浪士有村治左衛門より
首級を彦根藩加田九平治の首あるより薩藩の留守居
添役服田仁兵衛立合より事實巨細を判然とす此時有
村氏が所持品あり左に掲げり

一熊の皮ドフラン

右之中は金子四両壹歩貳朱ト錢百文

印鑑 壹枚 藥 少々 守札 壹枚

日記帳 壹冊 槍印一枚

兼清の岩の糸の歌を所持の烟管は剛付あり
 茲は兼清が兄ありける有村雄之助を櫻田より十二
 分の働きをあし一先此地を適き去り再び謀る重なる
 んと即日東海道をさし登りけるが伏見の驛にて幕
 吏の手は縛さるるが後ち同駅ある薩州郎は護送せし
 くとぞ夫より奈何ありしや覺束あり變動の翌四日薩
 州郎より將軍家へ届け出られしるものあり併せ

4

此説より可あらんが届書の寫しを

家来

有村雄之助

右に者昨朝の夜出門今に孫あり不申右に昨日遠
 及但馬守候所組合辻番所廻り場内にお果居る元
 家来有村治左衛門と申立者兄に沙摩屋の
 速良屋より尋方候はる未夕見當りる申は節柄
 と儀を付は候所届申上と申以上

松平信理を安んずる

申 三月四日

西 銃を腐す印

新ひーか

茲に復高橋多一郎其男庄左衛門の父子俱小櫻田の戦
 ひも人小劣らるる益に尚計る事ありしを本意を達せ
 けり浪花に至り生玉の神官島 男也が家ニ潜伏せ
 る幕吏等之を探索して既ニ事ゆも及むんとせしむるを
 高橋父子も夙くも悟り男也が家の難を避るんと夜
 小紛をて秋の坊に遁れ薩州に下らん事を計りし幕

秋の坊の
 大坂四天
 手寺の復
 寺又小川
 其寺同手
 の待多
 とを

吏の追捕急あるより切迫し事ありざるを知り父
 子とも小自殺せんと決心し小川某が家ニ至り櫻田
 の徒は同志ありし始終を語り且つ死後小石碕建
 立の緯を委頼し遺金六拾貳両を出し天王寺に至り
 父子俱又伏し于時三月廿三日あり多一郎名を
 愛諸とのり辞世の歌あり

ののたかを淋かろん今日よりあま

高け 愛諸

曇る称名の中も



高橋父子
小川氏に
遺金一七
死後と控は



莊左衛門を文學に通じ作る所の詩文を多く慷慨悲
壯あるを以て其志を知るに足り茲に録する數百篇
の詩中の一首あり

呉錦織成世路難憶君不耐淚潜々躊躇邸外月

明夜偏照行人腸裏寒

稲田重蔵を櫻田の場所にて討死あり山口辰之助鯉淵
要人の二個の重疔あり何卒して内藤紀伊守の館
小自訴せんとまのほど素より始め江府に來り地

理を知らざる人多けきや内藤家の館を知る
よみあき彼の山口と鯉淵を八代洲河岸を退き小
今ハ重疔の痛之強一足だれも行がらぬ苦痛を久
見んよりいと終は此の河岸より二個とも腹うた切
死したりけを茲に復金子孫次郎を櫻田の場所より來
りりし時を聞くひの跡ありけを遺憾やもとのあけ
もとも同志等本意を果せしん茲に居らんも用多
のそら無名に死するも亦耻あらん東や西に此の

地を脱し西國の方へ罷らんと四日の朝江府を發し日
 を經て東海道四日市の驛に至りし幕府よりの追捕
 嚴しゆき分這を海路より登るふ志摩の國鳥羽
 の港に避けんとはるを薩州の藩士阪口氏の爲に捕ら
 せ有村雄之助と共に伏見の驛より護送せし有村を
 奈何ありしや金子を後復伏見より幕吏に送らせ東武
 に至りぬ左に録まひ金子教孝が所持の道の記あり因
 此より掲げ

十三日阪口氏大坂よりきぬりありし伴あり
 行むるもまじりけり

伏見の豫杭を立りてんあつて居るもその事
 右よりある事しみちの記を始り終りの漏らる我々本意
 あ

近世櫻田紀聞卷之五終

